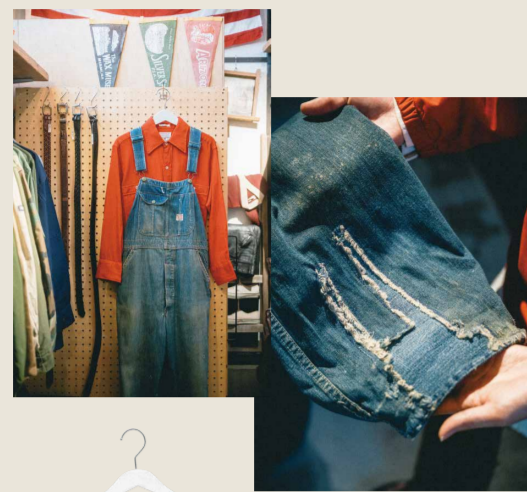


特集 クリームソーダが恋しくて



リペアも唯一無二の味わいに

インディアンマドラスの生地を使った1990年代のワンピース



"Levis TYPE II"1960年代

"あんさんどら"は、「瑞鷹」赤酒やあま酒、宇城のレンコン粉を使った生地はもちもち。手作り船子とクレームオブルが好相性



古いものが新しい。そんな時代



13

猟師用のウェアは1960~1970年代のもの



西育今



ichie

「昔の良いものを現代に蘇らせたい」と、レコードのジャケットをシャツにしたオリジナル



"あんさんどら 塩バター"のドリンクセット



菓舗まるいわ



古書汽水社

☎ 096-288-0315
 熊本市中央区城東町5-37ビュアース夢大ビル1F
 ☎ 11:00~21:00 水曜
 インスタグラム=@kisuisha

本と音楽と珈琲と、共栄堂

☎ 熊本市中央区城東町5-40-2F
 ☎ 11:00~19:30 土・日曜・祝日
 インスタグラム=@kyoueido.bmc

ichie used & vintage

☎ 096-342-6015
 熊本市中央区草葉町3-1
 ☎ 12:00~20:00 (土・日曜・祝日11:00から) 水曜
 インスタグラム=@ichie_used_vintage

菓舗まるいわ

☎ 070-6594-1900 熊本市中央区上通町8-23
 ☎ 12:00~19:00 水曜
 インスタグラム=@maruiwa1897

なんだかレトロを探していたら、甘いものが食べたくなり、和のしつらえが上品な「菓舗まるいわ」へ。明治30年に創業し、「岩崎靴店」として営業していた場所をリニューアル。所々に老舗の雰囲気を残した和菓子店だ。「靴店を移転し、ここに和菓子店をオープンすることに。昔ながらの佇まいが残る上通が好きで、景色に馴染むお店にしました」と店主・岩崎公子さん。なるほど、新しけれど昔かあるようなしつらえがある。鉄急須で淹れるお茶と、洋のエッセンスを加えた新しいどら焼き「あんさんどら」をいただき、訪れた一軒一軒を思い出す。

どんなレトロを取り入れようか。込められた物語と一緒に迎えれば、きっと心温かな日々を送ることが出来るはず。店主の笑顔が、それを約束してくれているようだ。

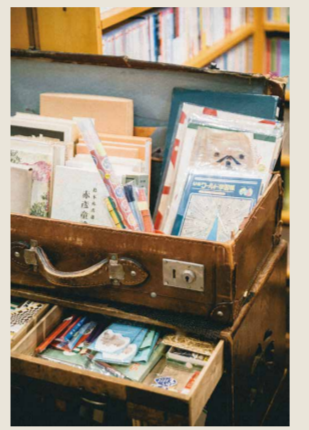
りますが、グッと我慢して店に並んでいますと西さん。自身がマニアだからこそ、バイヤーは私欲との戦い。古着の魅力を尋ねると、「ヴィンテージファッションって、現行のブランドの原型だったりするんです。それに、今、新しく作られたものも、いつか古着として並ぶのかもって考えると面白いですね」。流行は繰り返す、まさにそれ！技術者によって丁寧に作られたモノは、時を経ても色褪せないのだ。

続いては、上乃裏通りへ。アメリカ各地に買い付けに行く西京之介さんが店長を務める「ichie」には、ヴィンテージアイテムが並ぶ。チームは人気の「Levi's」ジャケットやパンツがそろい、機能美が魅力のワークウェア、1960年代の食器類まで。稀少なものに出会ったときは、つい自分で買ってしまう。



古書汽水社

古本は、1点ものも多く、まるで宝探し



文房具コレクターに委託したコーナーも



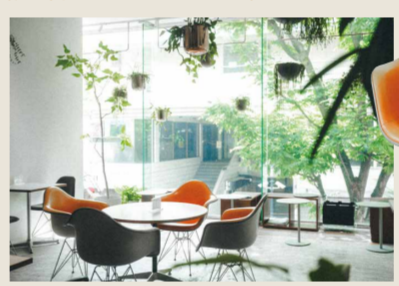
店主は日本のJAZZも好き

雑誌や古書は行きたい時代に妄想で旅をさせてくれる

選ぶポイントは「単純にかっこいいか」



チェアは、熊本県内のある施設から譲り受けたハーマンミラー社のイームズ



本と音楽と珈琲と、共栄堂



oraking



マチへレトロを求めて(続)



佐藤 啓太



一つひとつの収納ケースもレトロで可愛い



タンクマなどのタウン誌も!



マチにはさまざまなお店が並び、老舗も新店も程よくなじんでいる。8年前にオープンした「古書汽水社」は、「100年以上の歴史を持つ書店が複数ある並木坂」上通は魅力だったとここに古本とレコードを扱う店を構えた。限られたおつきいでマンガを買ったために古本屋に通いはじめた小学生時代、音楽にハマりレコードを集めはじめた高校時代、東京で培った収集癖は、次第に仕事になり、奥さまのご実家のある熊本に移住した頃には「趣味の仕事」に。「もう収集を通り越して、私を通過するだけで満足するようになりました」と店主・佐藤慶太さん(マニアのその先はこうなるのか)。店主が教えてくれたのは、装丁で選ぶ古本の楽しさ。「これはサントリーのトリスおじさんで知られる柳原良平のイラストが表紙ですけど、何と100円で手に入るんですよ」という具合。ジャケ買いしたモノを眺めると、うっかりハマっていくことも。面白い世界だ。

そんな「古書汽水社」に通っていたり、マチが好きだったり、自身も紙媒体とレコードのマニアだったりと、いろいろなんことが重なりカフェをつくってしまったのは、本誌・編集長の荒木久尚。ちょっとだけ彼の想いの詰まった「共栄堂」の話を。壁一面の巨大な本棚には、これまで集めた雑誌や書籍が並び、閲覧自由。ファッションや音楽、デザイン……。時代によって変わるものや変わらないものが、一冊一冊から伝わってくる。誰かに刺さったり、誰にも刺さらなかったりすると思うけど、それでいい」というのが考え。熊本の(当時の)今を伝えるタウン誌も並び、窓から現在の景色を眺めながら、ページをめくるたびにちょっと昔にふれる。「コーヒー一杯で何時間でも過ごせる、そんな場所だ」。